

各委員から頂いたご意見について

参考資料 1

論 点	委員からの主なご指摘
部活動の意義	<p>○部活動は生徒の自主的な活動と位置付けられているが、学習指導要領の中で「スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質の育成に資する重要な活動」と明記されている。</p> <p>○部活動は教育課程の中で学校外の活動の中で重要とされており、生徒指導等全てにリンクしているため、部活動の在り方として在校時間の問題は最大の課題。教育課程の中で部活動を抜きに考える指導者はいない。</p> <p>○学校生活の中で、学べて、生き方を考えて、そして縦のつながりがある、そういう場として部活動はとても大事。最近の若者はコミュニケーション不足で人間関係で悩むが、上級生、下級生、仲間、そういうやりとりがないと社会に出たときに多様な対応ができない。</p> <p>○自主的、主体的という大前提があるが、中学生には難しいため、校長や設置者などが強めに活動のガイドラインを決めたほうがいい。活動時間も中高、大学によって違ってくる。高校になると私立の学校等、主体的に任せる必要があるが、中学、高校の段階ではガイドラインをきちんと作るべき。</p> <p>○「全全部活動に入れ」という学校があるが、これはやはりおかしい。学習指導要領が自主的、自発的なものとしているので、そういうことはあってはならない。文化部の在り方にも関わってくる。例えばスポーツのユースクラブで活動している生徒や不登校の生徒が何か入らなきゃいけないからとりあえず緩い文化部に入るとか、そのような生徒たちのための総合文化部があるが実態は活動していない。居場所づくりにはなっているかもしれないが、そこまで強制する意味があるのか。地方の規模の小さい学校では例えば女子はバレーボール部と吹奏楽部しかなく、どちらも過酷な練習をしており、強制入部の場合、これでいいのかという問題があり、しっかりガイドラインに書き込むべき。</p> <p>○コンクールで良い成績の学校は教員と生徒の関係が深く、学校教育の延長として非常に密な関係が見られ、授業の中ではできない社会機能があり、登校拒否をしている生徒も部活動だけは来るなど、良い形で回っているところもたくさんある。</p> <p>○学校に部活動は必要。非常に個性的なデリケートな生徒が集まってくる部もあり、友達との話し合いや役決めるときにはトラブルになるが、それが子どもたちの勉強でもある。好きなことで一生懸命やることは必ず子どもを伸ばす力になる。</p>
文化部と運動部の違い	<p>○文化部はケガや障害になることが運動部ほどではないと思うので、別の理屈で語る必要がある。</p> <p>○文化部の活動は多様であり、囲碁将棋、かるたなど運動部のように順位が決まって戦う部もあるし、交流や講評といったみんなが集まって様々な意見を出し合うものもあり、指導者や顧問の関わり方も多様。ただ多様だということだけで全てを認めていると最終的には顧問に過剰な負担が出るので、最低限、子どもたちが主体的に活動できるような環境をきちっと定めていかなければならない。</p> <p>○文化部が素晴らしいのは勝ち負けをあまり意識しないでやること。お互いを尊重して、交流しあって、当然順位や賞があってもいいが、将来、また生涯を通じてその文化活動に戻るのではないかという意味で中高の文化活動は大切。やりすぎないように、少し本人たちにやってもらうことを多くするという観点が必要。</p>

部活動指導員の積極的な任用	<p>○合理的な練習のためには外部指導者の活用が必要だが、その経費の問題が重要であり、保護者負担なのか、学校負担なのかも考えていく必要がある。</p>
顧問の負担軽減	<p>○労働基準法では4週間のうち4日休むことになっているが、部活動の顧問の教員は、安全管理等の面で土日も同席が必要なため休めない。労基法すら守れていない学校が多く、働き方改革以前の問題。教員は部活動や授業だけでなく、非常にたくさんのマルチタスクの仕事をしており、特に土日は部活動が重なる。運動部だけでなく、文化部の部活動の顧問も過酷。個々のデータをみると、過労死ラインを超える非常に時間外勤務が長い教員もいて、過剰労働になっている。平均値や丸めた数字で現状把握をした気になって議論するのは非常に危うい。</p> <p>○部活動に熱心な教員は、部活動の時間が授業準備の時間よりも長くて重い。限られた時間とエネルギーをどこにもっと振り向けるのか、優先順位の問題。</p> <p>○小学校の一部の文化活動でも教員の負担がある。</p> <p>○特に、新任の教員が多重労働になりやすく過剰な労働がかかっている。その部活動の経験もない教員が、休日にバスで隣県まで引率しなければいけないことが問題。</p> <p>○授業が終わって部活動の顧問をして、子どもたちが完全下校をしてから授業準備をすると、帰ったら寝るだけという生活なので、国が働き過ぎだよ、過労死だよと動いてくれることは本当に難しい。子どもに良かれと思って教員は頑張りすぎるが、ある程度ここまで大丈夫というラインが出れば、安心してみんな自分の仕事をして家に帰れるので、みんなが納得できる線が出せばいい。</p> <p>○教員として一番ショックなのは部活動を一生懸命やっている顧問が亡くなること。子どもたちもあまりに夢中になりすぎて将来生きていけるのかという状態になる子もいるので、未然に防ぐためにも任せる部分ときちんと最低のラインを守ることがないとやりすぎてしまう。</p> <p>○全員顧問制で成り立つのか。やりたい教員のために環境は整えたいが、やりたくない教員は顧問を選択できる仕組みは運動部のガイドラインにも踏み込んで書いていない。</p> <p>○顧問は辞書の意味での顧問を認めなければいけない。技術的な指導者である必要はない。このあたりをガイドラインを作る上で検討していただきたい。</p> <p>○子どもたちは見様見真似でできる。外部から指導者を呼ばなくても、生徒同士でやっている。ただ演奏会などをするときには職員会議で顧問が動くといった関与もある。</p>
顧問を対象とした研修	<p>○専門外の指導者が多いため、指導者を指導する機関を設けて、その中で専門的な分野を深く追及してけるとよい。</p> <p>○東京音楽大学では、2019年から吹奏楽を教える人のための教育機関（吹奏楽アカデミーコース）ができるが、大変な反響。吹奏楽を教えるために先生を育てる時代になっており、ガイドラインづくりが必要。</p>

**休養日の設定や
活動時間の制限**

- 部活動の問題は、限られた時間とエネルギーをどこにもっと振り向けるのか、優先順位の問題であり、子どものために、子どもを潰さないために大事。部活動以外の時間も大切にしていけない。子どもたちが多様な価値観や経験を持った大人と接し、議論することにより、より厚みのある経験を積むことができ、本当の意味での「生きる力」を定着させることにつながるので、顧問の教員以外の大人や友達と過ごす時間も認めていくガイドラインにした
- い。
- 部活動の時間の取り方は、大会を目指す部はかなりの時間を費やし、フェスティバルを中心に活動している部はほどほどの時間で活動している。短縮化している部もある。
- 「静岡市立中学校部活動ガイドライン」（2018年2月1日策定）では活動日を週4日（平日3日、土日はどちらか1日）としたが、特に吹奏楽部から週4日はあまりに少なく、唇の感覚が変わって楽器がうまく吹けなくなるのではないかとの懸念や、吹奏楽に熱心な他の市に勝てないとの意見等、大きな反響があった。一方、これだけやって何になるんだとの意見もあった。一流の演奏者を目指しているわけではなく、あくまでも中学校の部活動なので、限られた時間の中で精一杯やって、そこで得られた結果がすべてなのではないか、そういう教育をすることが学校教育では当たり前なのではないかとの意見もたくさんあった。
- 一生懸命部活動をやる教員は部活動が最上位になる傾向があり、とにかく宿題をやらなければ部活動をやらせないとか、遅刻をしたら部活動をやらせない傾向があるが、子どもたちが自発的に考えて、主体的に自分の生活をつくれる学校教育でなければならない。
- 部活動の良さや効果を否定しているわけではないが、効果があるからと言ってそれで大丈夫というわけではない。
- 週4日、5日の活動でも結構実現できることはたくさんあり、毎日やらなければ効果がないのかといわれると必ずしもそうではない。そのあたりの効果とかける時間のバランスを教員にとっても生徒にとっても考えていただきたい。
- 吹奏楽は一日でも休むと本当はしんどい。ものすごく悪くなる。何とか学校でやらなくてもいけるところがあるが、なかなかない。毎日足がそこに向けてやってこそ型ができるもので、二日行って一日休みでは本当はなかなかうまくならない。長時間ということは別として毎日10分でもいいので活動時間を与えてほしい。

<p>生徒のニーズ</p>	<p>○その部活動があるからその学校を目指してくる生徒がいるので、生徒の居場所確保の観点も重要。ガイドラインの作成にあたっては、生徒や保護者の声など時代のニーズを取り込まなければならない。</p> <p>○部活動は子どもたちの自由な時間を奪うという問題が非常にある。レギュラーになれば楽しいが、なれなかった子は見学や練習のみで時間だけとられる。部活動を優先するよう顧問に言われ、他の習い事をやめた生徒もいる。</p> <p>○市の部活動ガイドラインができたため、活動時間が制限され、教員も生徒も心底がっかりしている。生徒は部活動のない日にお金を出し合って自治体主催の音楽室に練習に行こうと計画しているが、経済的に余裕がない生徒は参加できず、部活動が制限されなければ余分なお金を出す必要もない。楽器の使用や運搬でも今後問題がでてくると予想される。</p> <p>○生徒と音楽をすることにやりがいを感じて勉強し、活動を通して生徒や保護者と一体感が生まれ地域にも貢献してきたのに否定された思い。経済的に余裕のない家庭は格差を子ども自身も自身が実感させられる。音楽を共にする仲間を無邪気に愛し生きる喜びを感じている者にとっては、一方的に奪われたと感じている。</p>
<p>教員の達成感</p>	<p>○部活動に熱心な教員は、賞をとったり、ほめられたり、学校から称えられることが気持ちよくて、授業準備がお留守になることもある。</p> <p>○教員は部活動で雇われているわけではなく、音楽の先生は音楽の授業で子どもたちを伸ばすべき。ともすれば部活動は達成感もあり保護者にも子どもたちにも喜ばれるのでつつい比重を占めてしまうので、注意する必要がある。</p>
<p>地域との連携</p>	<p>○静岡県掛川市では、2018年春から地域で部活動を行っている。教員の負担を軽減しつつ、部活動の良さを残して、子どもたちが多様な体験ができる選択肢や文化や芸術との出会いの場を提供できる部活動を地域で実現させる「新時代の課外活動への挑戦」に取り組んでおり、市内の中学校4校から16名が吹奏楽部に入学している。中学校の文化部が吹奏楽部と美術部の二者択一のような現実の中で、もっと子どもたちが多様な芸術文化に触れる機会をつくるために、管楽器演奏以外の音楽、主に合唱、演劇、放送などを融合したプロジェクトをはじめている。</p>
<p>ガイドラインの作成・運用にあたって</p>	<p>○ガイドラインができて、国からの支援がないと経理の問題で実効性がない。</p> <p>○文化部のほうで活動時間が長いというデータもあるが、校長、教育委員会、設置者が通知を守れないという現状もあるので、関係団体と連携をしっかりととりながら進めていくべき。</p> <p>○部活動は学校の魅力、生徒募集との関係があり、切り離せるとは思わないが、授業でも魅力を出していただくことが本筋。生徒募集とも関わるため過熱化が止まらないので、みんながガイドラインを守るようにどこかが抜け駆けをしないように運用の仕方も含めて考えていかなければならない。</p> <p>○運動部のガイドラインが既にあり、文化部のガイドラインが出るとセットで運用されるので、運動部のガイドラインで抜けているところがあれば、後から作る文化部のガイドラインで全部拾っていく必要がある。</p>